会長ご挨拶～地域のレジリエンスということ～

令和六年四月　東京双松会会長　毛利信二
（北高二十七期　理数科六期卒）

東京双松会会員の皆さん、こんにちは。会長の毛利です。昨年の総会で井原様から会長職を引き継ぎました。改めまして宜しくお願い申し上げます。

今年の元旦は、松江には珍しいほどの穏やかな日よりでした。

しかし、夕刻、緊急地震速報がけたたましく鳴り響き、その静寂が破られました。長い横揺れに、きっとどこか遠くで強い地震が発生したに違いないと直感しましたが、程なく、石川県能登地方を中心に震度7の大地震発生を知りました。

あの熊本地震から七年をかけてようやく昨年三月、全ての仮設住宅が解消されたばかり。さらに、夕闇が広がる中、輪島市内に火災が発生し、炎の勢いがいつまでも収まらない映像に、五年前の新潟県糸魚川市の大火災を重ね合わせながら、地震による建物倒壊や津波だけではない複合災害を予感し、報道が伝える被害者数がまだ一桁の内から、これは遙かに大きな災害となるに違いないと、思わざるを得ませんでした。

私の悪い予感は的中し、二百四十名を超える方が亡くなり、発災後三ヶ月を過ぎた四月に入っても、熊本地震の倍以上の方々が避難先で不自由な生活を余儀なくされている一方で、仮設住宅の建設が大幅に遅れ、熊本ではこの時期ほぼ解消されていた断水が今も八千世帯近くで続くなど、令和六年能登半島地震被災地の実情は現在も大変厳しいものとなっています。

私が理事長を務める住宅金融支援機構では、発災直後に全職員の安否確認を行って安全を確認した後、直ちに情報収集を開始し、被災自治体に職員が入って住まいを失った方々への支援に毎日取り組んでいます。熊本地震等で被災者支援に当たったベテラン職員を責任者として現地に派遣して分かったことは、自治体の対応が熊本のそれとはずいぶん差があるというショッキングな事実でした。インフラの整備状況の違いもあり、やむを得ない事情はあるにせよ、実際、私自身も被害の一番大きかった奥能登地方に入って驚いたのは、当時既に発災後二ヶ月を過ぎるというのに現地は発災直後のまま、あたかも時間が止まったかのごとく、復旧・復興の槌音のまるで聞かれない有様に、声を失うほどでした。

長い前置きとなりましたが、コロナ災禍が収まって再び人口の東京一極集中が始まっている一方で、実は地方移住も進みつつあります。人はどこに住むのか、仕事、子供の教育、家族関係、経済的事情など様々な要因はあるでしょうが、必ずしも合理的な理由だけで居住地が最適に決まるものではないことは改めて言うまでもありません。しかし、災害が全国各地で頻発し、しかも明らかに激甚化している昨今、いざというときに自分がどこに住んでいるかは、大切な家族の命や財産を守るという観点から大変重要です。残念ながら災害を完全に避けることなどできない以上、発生した後如何に迅速で適切な対応がとられるかは、いわば「地域のレジリエンス」として、これからもっと重視されるべきではないかと思います。

様々なハザードマップに加え、避難場所の確保、備蓄規模・内容、消火能力、応援態勢やこれらを適時適確に指揮発動するために求められる行政能力など、考慮すべき要素はそれほど多いわけではありません。その結果だけで居住地を決めることは現実には困難かもしれませんが、せめて、自身のお住まいのエリアでこれらがどう整っているのか、あるいは整っていないのか、を知っておくだけでも、いざというときへの備えとして大切なのではないかと考えます。

繰り返される災害に、もっと過去の知見を生かせたら、と思うことが残念ながら非常に多い私自身の経験が、そのように語るのですが、皆さんはどうお考えでしょうか。

一刻も早い被災地の復旧復興を祈るとともに、会員各位のご健勝をお祈り申し上げます。